

ペイター藝術とその変容——ワイルドそして西脇順三郎

凡例

- 一 本文中の欧文からの引用の訳文は、訳者名の記載がない限り、すべて筆者によるものである。
- 二 括弧「」内の文は筆者の註である。
- 三 和文図書や翻訳書からの引用頁数は漢数字、欧文図書からの引用文は算用数字で表記した。
- 四 ギリシア人名の欧文表記は原語ではなく、アルファベット表記にしてある。
- 五 西脇順三郎の郎は、書名の中で「郎」が使われている場合を除き、旧字体の「郎」に統一した。

ヨーロッパがその目鼻顔立ちを整えて全体的な姿を現したのは、十八世紀である。成熟の後に訪れるのは衰頹或いは分裂である。十九世紀は分化の時代となり、科学においても専門化していった。ヨーロッパ的なるものが一旦完成を見た後、ヨーロッパに広く影響を及ぼしたフランス革命により、王侯貴族の時代から、十九世紀は中産階級の時代を迎えた。独自の価値基準を持ち得ぬ中産階級には、俗受けしやすい自由、博愛、平等という観念に得難い新しみを感じこそすれ、それらの観念が根生のものでない限り、その実質を伴うものではなかった。それ故に、曖昧な観念ばかりが先走ることになる。

一方、十五世紀初めに海外に進出を始めたヨーロッパは、様々な地域と民族にキリスト教への改宗を強いて人々を精神的に支配しながら植民地化を進め、そして収奪を続けてきた。日本のように植民地化する隙がなければ、キリスト教を布教し人心を惑わし取り込もうとした。會澤正志齋（天明二年「二七八二」〜文久三年「一八六三」、水戸藩の学者。藤田幽谷に学ぶ）は早くにその『新論』において、「西洋人が海上にその勢力をほしのままにするようになってから、ほぼ三百年近い。その領土はますます広がり、その野心はますます旺盛である」のは、「その知恵と勇氣が普通人よりもはるかに優れているため」でもなく、「その仁愛が大いに民衆に及んでいるため」でもなく、或いは「礼楽刑政の諸制度が完璧にそなわっているため」でもなく、況や「人力を越えた神わざのなすところ」でもなく、一にかかって西洋人が

「その技倆を發揮するのに頼みとするものは、ただキリスト教あるのみである」（會澤正志齋「新論」、『日本の名著』第二十九卷、「藤田東湖」、橋川文三訳、三三五頁）と、卓抜な慧眼を見せている。

実に、排他的な「ねたむ神」（「出エジプト記」第二十章）の精神的支えを得て、原住民の虐殺も厭わず植民地は開かれていった。アングロ・サクソンはアメリカ原住民を虐殺し、二十万乃至百万人いたオーストラリア原住民アボリジニーを毒殺や射殺で二万人にまで激減させ、タスマニア人にいたっては「原住民狩」などにより^{おうさつ}塵殺し絶滅させた（西尾幹二『GHQ焚書図書開封』二二三～七頁及び二〇六～一三参照）。キリスト教徒として結束したヨーロッパ人は、海外活動で遭遇する宗教は邪教として撲滅すべきものであり、キリスト教徒である白人のみが人間で、それ以外は人間以下の動物にすぎなかった。そこには自己の排他的普遍化のみがあり、自己を相対化し、宇宙を関係性において観察する相対主義精神が脱落していたのである。

ダーウィン（Charles Darwin 一八〇九～八二）の『種の起原』は、キリスト教にそぐわぬ進化論ゆえにキリスト教社会に大きな反撥的反響を巻き起こした。しかし「最高度に優勢な種類が、いたるところで勝利をかちとっていく」（岩波版『種の起原』下、八杉竜一訳、二十五頁）という物質的な競争原理に立つダーウィンのこの言葉は、虐殺を伴う植民地開拓に示されたアングロ・サクソンの精神や気質によく符合しよくそれを反映するものに他ならない。自然観察を極めた仏教における相対依存関係で宇宙を捉える有機体的思想とは相容れないゲルマン的思想がそこにはある。その点ではギリシアの合理主義の導入でゲルマン民族の魂の恢復をもくろむペイターは生成という観点ではダーウィンに言及しても、それ以上は踏み込んでいないし、西脇順三郎（明治二十七年「一八九四」～昭和五十七年「一九八二」）もこの進化論には

疑義を呈している。

このような排他的膨張主義の下では、新しく出会った対象の本質を受容できない。取り入れられるとしても、単なる外面的模倣に終始することは、十七世紀初め以来、漆器次いで有田焼が西欧に輸入されるようになり、ドイツのマイセンでは一七〇八年にやっと研究の末に、有田をまねた白い磁器を完成させたことを見ても過目瞭然である。マイセンであれ、イギリスの諸窯であれ、オランダのデルフトであれ、それらは外面的模倣、或いはそこから変態した意匠にすぎない。それとは趣を異にして、フランスの印象派画家達や、ダンテ・G・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti 一八二八〜八二) 或いはワイルド (Oscar Wilde 一八五四〜一九〇〇)らの英国唯美主義者達は、江戸藝術の本質を見極めて、それぞれの藝術様式に応じた形で己のものとしている。しかしこれは飽くまでも先覚的な藝術家の場合であって、一般的には、キリスト教精神に追い風を受けたゲルマン的排他的膨張主義が十九世紀における支配的雰囲気である。この氣質が本質的にもつ押しつけがましさ、他者への干渉を逆説を以て痛烈に笑嗤しょうししたのが、ワイルドである。

キリスト教の一神教的絶対性とも相俟って、このゲルマン系の人々の排他的普遍化乃至膨張の氣質と、この氣質に起因する相対的觀察や中産階級における定見の闕如により、西欧は自分自身を知ることなく、自己を見失い己の魂を失って行ったのである。ウォルター・ペイター (Walter Pater 一八三九〜九四) が相対主義精神を説き、ワイルドが、ソークラテースが座右の銘としたデルポイの門に刻まれた標語「汝自身を知れ」をひと捻りして、「汝自身となれ」と主張したのも、そのような時代背景と社会情況に対する危機意識があつてのことである。二人ともすぐれたギリシア学者であつたことに注意しておかねばな

るまで。

十九世紀に擡頭した中産階級は、このように価値観が曖昧で空疎な観念に囚われ、排他的膨張の中で自己を見失ったが、十八世紀に頂点に達したヨーロッパ文化は完成したものとして、その形だけは引き継がれてゆくことになる。十八世紀のそのヨーロッパ的なものが、中産階級によりその本質が必然的に空洞化されることになり、その空洞には異物が入り込むことになる。それが偽善であり欺瞞である。そういう意味で、十九世紀は「野蠻に向つての墮落の時代」（吉田健一『ヨオロッパの世紀末』二五〇頁）だったのである。形はあつても魂を喪失した時代に立ち至つた。一方ではその時代相が又その時代の藝術形態を生み出していった。

例えば、ダンテ・G・ロセッティは、進化論的生物学者トマス・ハックスレー（Thomas Huxley 一八二五～九五）が一八六九年に、「知り得ぬ」（agnostic）という言葉を使って以来、流布するようになった不可知論（agnosticism）が登場する以前に、早くもそのような立場に立ち、キリスト教の形だけを借りて愛と美を歌つた。ロセッティはカトリック教徒の父ガブリエーレ・ロセッティ（Gabriele Rossetti 一七八三～一八五四）と、宗教心の篤い英国国教会の信徒フランシス（Frances Rossetti, née Poldroni 一八〇〇～八六、父親ガエターノ・ポリドーリはピサ近郊のピエンティーナ出身のギリシア系イタリア人）とを両親として生まれ、殊に母からは熱心な宗教教育を施された（ロセッティ『いのちの家』伊藤勳訳、「ロセッティ 美の宗教とその背景」参照）。それにも拘わらず、感覚で知覚し得ないものの領域には臆見を以て入り込まないという懷疑主義により、藝術を「美の宗教」に仕立てることで宗教に代えたのである。

ペイターの場合は、同時代に関わる自分の考えは、社会の批判を免れるために他の時代に、或いは他

の事物に事寄せて間接的に表現した。一方、ワイルドは社会の偽善の仮面をからかい、もぢりとしての仮面をその藝術形態に仕立て上げた。

十九世紀というヨーロッパ的なるものの分裂の時代、「遠心的傾向」の立ち勝った時代を迎え、己が己でなくなってしまう危機的情况において、己と民族の魂の恢復の手立てを探り出したところに展開されたのがペイター藝術である。

民族の魂の恢復を求めて目が向けられたのが、先づはゴチック・リバイバルの運動に見られるように、ギリシアとアラビアの学術がラテン語に翻訳された十二世紀から十三世紀あたりであるのは、その時代が文明の夜明けとして西欧人にとって心のふるさとであるからに他ならない。ゴチック・リヴァイヴアルの運動は唯美主義運動へと移行していったが、その英国唯美主義を担った代表的藝術家達が、スウィンバーン (Algermon Charles Swinburne 一八三七—一九〇九)、ペイター、ワイルドを見てわかるように、優れたギリシア学者であったことは見逃し難い事実である。

民族の魂を見失った渾沌たる時代相と社会状況の中で、ペイターが藝術において企てたのは、ゲルマン的氣質がもたらす蕪雜醜悪でまとまりをなさなげな状態をギリシア的理智と有機理論を以て形を匡正し、ゲルマン民族の魂を恢復することであった。即ちゲルマン的象徴思考をギリシア的合理主義思考を以て合理化することであった。

ペイターが二十六歳の時に『ウェストミンスター評論』(Westminster Review) に発表した処女評論が、「コウルリッチの著作」(“Coleridge's Writings”) であったのは偶然ではなく、非常に示唆的である。コウルリッチは、西協順三郎も「コウルリッチはすばらしいギリシア学者」(伊藤勳『ペイターと西協順三郎』

三〇三頁）と褒めあげているように、すぐれたギリシア学者であった。この詩人はペイターからすれば、そのゲルマン的象徴思考を、ギリシア的合理主義思考を取り込むことよって、へもつともらしさ）を具えた合理的象徴思考に生み返した藝術家だったのである。ペイターはこの意味においてコウルリツヂの蹤迹を追った。

万象は相互に繋がり合っていて、個々の事物は同時に相互の関係において初めて存在するという有機体論をペイターは奉じていた。宇宙は分断されざる全体性であるという宇宙論、即ち『涅槃経』にある有名な言葉、「一切衆生悉有仏性」に通じる考え方を持っていた。自分が今目の前にしている対象は自分にとつて何であるのか、というペイターの基本的批評姿勢は、自己にこだわる点ではゲルマン的ではあるが、宇宙を関係性において見ようとする動きを胚胎するものでもある。この批評姿勢によりペイターはいつも対象との関係を測っていた。そしてワイルドも仮面を用いて相手の反応を窺い、それとの関係を測った。他者との関係を測るところに、「自分自身になれ」というニューヘレニズムを標榜するワイルドの主張も成り立つ。

ペイターもワイルドもギリシア学者として、物事を真にあるがままに見るといふギリシア的な物の見方に批評の基本を置いている。こうした姿勢はゲルマン的象徴思考或いはキリスト教を信仰する一般人々には、相容れないものであつたであらう。

後者について附言すれば、キリスト教においては現象に神の啓示を見出しそれを合理的思考を超越して信仰するものである。そこにはゲルマン的象徴思考に通い合うところが見出せる。神の子イエスの言葉は絶対であり、信者はそれを合理的思考を以て考察するのではなく、ただそれを真理と信じることに

意義と救いがあり、イエスと信者個人とはイエスの言葉の絶対的信仰の情念で深く結びついており、必然的に思考の自由は制限される。日本の神道やギリシア宗教におけるような開かれた共同社会における祭礼とは対蹠的な趣を見せるものである。

仏教はギリシア哲学と同じように、縁起、即ち宇宙の因果関係の解明という科学的思考であり、自然観察を通して人間の内面心理を探究する哲学として、釈迦の言葉は絶対的な神の言葉ではなかった。中村元の次の言葉は、その辺の事情をよく説明している、「イエスの場合には、神の子としての『わたしの言葉』のうちにとどまらなければならぬので個人性が顯著であるが、ゴータマ・ブツダが説き教へる理法（＝ダルマ）とは何人でも知りうるものであり、また何人でも説きうるものであり、かれ個人に由来するものではないと考へてみた」（『インド思想とギリシア思想との交流』三〇五頁）。道元（正治二年「一一二〇〇」）「建長五年「一一五三」も「諸仏の道現成、これ仏教なり」（『正法眼蔵』、「仏教」と言い、覚者たる様々な仏の言葉を現前成就したものを仏教だと教示している。

如実知見、即ちありのままに見ることは、仏教の根本姿勢である。この姿勢は日本人にはごく普通の物の見方である。「心とは山河大地なり、日月星辰なり」（同上、「即心是仏」、或いは「万法即心なり」（同上、「心不可得（後）」）と言う。自然そのもの、或いはすべての存在が心であると言うのは、万象に即して心があり、心に即して万象があるということである。目に見える自然は心の反映に他ならないが故に、自然を見て己の心を知るとも言い得る。日本人が仏教哲学の根本をなす如実知見という姿勢を、日本に仏教が伝わる前から持っていたであろうことは、日本語自体が自己と他者との関係性を測る機能をもつ言語であることから推察できる。それ故に、日本人は常に他者との関係に目を置いてきた。その

意味で、ギリシア的有機体論を基礎にして、万象を関係性においてありのままに捉えようとするペイターやワイルドは、日本的な物の見方に近いところにいる。就中、ワイルドはそうである。ペイターは、唯美主義批評においては「自己の印象を真にあるがままに知ること」(“Preface,” *Renaissance*)¹⁾だと言っているが、如実知見を否定しているわけではない。しかし物の見方に曖昧さを残した。ペイターは批評藝術における自己離脱を言いながら不徹底である所以がそこにある。それは、ペイターの目論見がゲルマン的象徴思考を合理的な形に生み返すことであり、その象徴思考形態には呪物崇拜が伴うので、やむを得ないことではある。物に囚われている限り、己を捨てた悟りはないからである。そこにペイター批評の限界がある。

目の前の自分を魅了する物が自分にとって何であるかというペイター批評の根本義自体が、他者との関係を測ることやそれとの調和を図ることは考慮の他であるゲルマン人気質に胚胎しているが故に、完全な自己離脱を不可能にしている。

実際、引用文を自己の都合の良いように書き換えたのも、或いは又、ペイターはギリシア学者でありながら、そのギリシア観がゲルマン的中世精神により中世的色彩を帯びギリシア本来の姿が歪められているのも、ペイターのゲルマン的気質に由来する。自分に引き寄せてしか物が見られないのがゲルマン的象徴思考の特徴である。仏陀の存在論が相對依存の關係性で捉える縁起説に立っていることや、或いは『古事記』の中で、伊邪那美命の「成り成りて成り合はざる處一處」²⁾に、伊邪那岐命の「成り成りて成り餘れる處一處」を「刺し塞ぎて、國土を生み成さむと以爲ふ」という表現の背景にある万象の存在の相互補完的關係性の認識とは對蹠的に、自己を中心とする存在論と敵對的二項對立の觀點に立つのが、

ゲルマン氣質である。

さはれペイターの意図はゲルマン民族の魂をギリシア精神の助けを借りて有機的構築性に保障された形に生み返すことであつたので、中途半端な自己滅却は必然の結果である。この中途半端によりそれまでになかつた全く新しい藝術様式を生み出したことはペイターの功績である。

ゲルマン的氣質とは別に、ペイター思想及びその人生觀の根柢にあるのは、エピクローロス哲学である。『享樂主義者マリウス』は、エピクローロス学徒マリウスの成長に伴う思想遍歴を辿るものであるが、どの宗教にも共通する本質的なものをキリスト教の中にも見出そうとしているだけで、最終的にはキリスト教信者のふりをした、つまりその仮面を被つたエピクローロス学徒だったのである。こうした心的様態はダンテ・G・ロッセティやワイルドにも見られる偽善の藝術的変容としての形状のすり替えである。この仮面に隠れた素顔が語るものは、自然主義、感覺論、主觀的時間意識、原子論に基づく虚無性の認識、自己脱却、懷疑主義、有機體論的生命觀である。

パルメニデースの絶対的一者論と、その流れの中で生まれてくる原子論、殊にエピクローロスの原子論に立つ思想とが、ペイターの思想的基盤と見てよいであろう。原子論はそれまでのギリシア人一般にはなじみのない唯物論ではあるが、エピクローロスの原子論は、偏倚という原子の動作を認めることにより、近代科学の自然觀が機械論的枠組に即しているのとは異なり、目的論的枠組の中にある。

ペイターが「コウルリツヂの著作」において、絶対主義精神ではなく相對主義精神の必要性を説いたのも、このような思想的立場に立っているからである。宇宙をひとつの生命體と見る立場においては、親密性或いは相互滲透性の原理が主体となるが故に、相對主義の立場を明確にしなければ、ペイターの

批評と藝術を正当化し得なかつた。

ただ、この評論において絶対主義精神と言っているのは、例えば、パルメニデースの絶対的一元論の「静の学説」或いはヘーラクレイトスの諸行無常の「動の学説」などのような公式的教義を指すものがある。しかし恐らくはペイターの意識の根柢には、科学の領域にまで、支配的影響力を及ぼすキリスト教の絶対主義に対する反撥があつたと思われる。それをあからさまに言うのは憚られたのであろう。

さて、西脇順三郎はこのような思想が滲透したペイターの『享樂主義者マリウス』を繰返し読み込んだ詩人であつた。西脇藝術を語る場合、この点は見逃し難い重要性を持つていると見なければなるまい。ギリシア哲学はインド哲学と多分に関わり合つてゐる。エピクローロス哲学は殊にその傾向が強い。その自然主義、感覚論、判断中止の懷疑論、心の平靜即ちアタラクシア、感覺的受容性の重要性などは、双方に共通するものであるが、殊に懷疑論や泰然自若たる態度を保つことを理想とするアタラクシアは明らかに仏教哲学に共通するものであり、インド哲学からの影響を見せている。感覺的經驗を超えて臆見を語ることを戒める懷疑主義は、感覺第一にして自然觀察をする如実知見の科学的立場においては基本的姿勢となるものであるが、キリスト教とは相容れない。仏教もエピクローロス哲学もこの臆見を厳しく戒めた。ダンテ・G・ロセッティとウィリアム・M・ロセッティ (William Michael Rossetti 一八二九〜一九一九) 兄弟もこの姿勢を貫き、ペイター自身も虚言或いは偽善に通じる臆見を排除する立場に身を置いた。

浄土宗を宗旨とする家に育つた順三郎にとって、『マリウス』に展開されたエピクローロスの思想は受け容れ易いものであつたことは想像に難くない。詩人は仏教とキリスト教について、「人間というも

のは、一つ信じていて、もう一つにも反対でなければ、両方信ずるということは当然」であると言いは、物欲を捨てると言う「一つの見地からみれば、おなじ」であると言は、キリスト教を否定することは、私には仏教のほうが遥かに進んでいると思う」（『ヨーロッパ現代文学の背景と日本』、『言語文学芸術』二十六頁）と、仏教に本来的な親近感を寄せている。

順三郎は、ペーターの語るエピクローソ的な思想を巡り歩き、更には己の成長過程にあった家庭環境としての仏教の世界へと、年を重ねるにつれて回帰を深めていった。永遠というアタラクシアを求め、大空三昧を言挙げするに至ったのは、仏教思想を藝術理論に応用しようとしたからに他ならない。しかも自己にしっかりとなじむ思想だったのである。

先に西脇家は浄土宗を宗旨としたと書いたが、順三郎自身は宗派にこだわらず、仏教の根本義に目が向いていた。因みに、大修館の編輯者であった詩人川口昌男が、昭和三十六年七月に出た順三郎の『あざみの衣』の編輯に携わっていた頃、用件があつて港区白金にあつた順三郎の家を訪ねたことがある。その折、順三郎は、「今日はこれから高野山に行きます」と語っていたという。日本人は宗旨に拘わらず、様々な宗派の寺に詣でることは一般的なことはあるが、川口が筆者に語ったこの逸話に見られる何気ない言葉は、順三郎も殊更に仏教の宗派にこだわらなかつたことを示している。

西暦一〇〇〇年頃に始まつた浄土教はインドで広く展開した後、中国に伝わり、九世紀に円仁（延暦十三年「七九四」〜貞観六年「八六四」）が比叡山に移植し、やがてそれを基にして法然（長承二年「一一三三」〜建暦二年「一二二二」）が開創した浄土宗、インド僧菩提達摩（生年不明〜五三〇年頃）を初祖とする禪宗、即ち曹洞宗、臨済宗、黄檗宗、或いは又、五〜六世紀にインドに出現した密教は八世紀初に体系的に整

備されて中国に移植されたが、それを九世紀初に空海（寶龜五年「七七四」）承和二年「八三五」が招来し大成した高野山の真言宗、順三郎は、こうした宗派の違いはあまり厳密には考えていなかったようである。

ペイターが社会からの批難防御のためにキリスト教徒のふりをしたことは別にして、宗教の本質を求めた点では順三郎とペイターは通い合うところがあり、宗派を超えた仏教の根本義を尋ねたのが順三郎であった。詩人は『斜塔の迷信』の中で、「私のやりたい方法は、特定の思想も感情も感覚もない白紙となつて（もの）にあたる」（『詩美の問題』）ことであると言っているが、このような考え方は、達摩の説いた〈壁觀〉にその濫觴を辿ることができる。壁觀とは、「心の壁のように静かになつて、外界と内心、自己と他者、凡夫と聖人など、一切の対立を超え、空を悟ること」（『仏教辞典』）。これはペイターの言う「パルメニデース的タブラ・ラーサ」やアタラクシア思想に通じてゆくものである。

畢竟、ペイターそして順三郎が求めたものは飛去ひこしつつ飛去せざる時である。その思想の核心をなすものは、ペイターにあつては不生不滅の絶対的の者というパルメニデース的永遠であり、片や順三郎においては自己を忘れ万象を以て教えられることを旨とし、五蘊ごうん皆空を照見して無相三昧の境地に至ることであつた。その究極目的に限れば、両者にどれほどの逕庭があろうか。

平成三十一年己亥二月四日

著者識

ペイター藝術とその変容——ワイルドそして西脇順三郎 目次

第一章 西協的アタラクシア——永遠、その思想的背景 21

一 生命の根源の探求 21

二 エピクローロス哲学との出会い 23

三 眼の宗教の基盤 25

四 現在に息づく過去 27

五 白紙の人間とタブラ・ラーサ 29

六 ギリシア哲学とインド哲学 33

七 一即多 36

八 思い出は快 39

九 内面深化から寂滅へ 41

十 象徴主義 44

第二章 ペイターとギリシア——西脇順三郎の藝術思想を暗示するもの 48

一 「藝術のための藝術」の礎 48

二 相反するものの結合と無 51

三 構築性 58

i 理性的音楽／ii 彫刻的にして絵画的構築性／iii 時間の空間化／iv 内面的対話

四 霊的形態 75

第三章 ペイターと現代日本とを繋ぐもの——西脇順三郎の場合 82

一 豊饒と渾沌の時代 82

二 ペイターの二重性 84

i 求心力／ii 有機体論と偏倚／iii 求心力と内面深化／iv 自己滅却の個人主義／v 時代精神のもちり

三 西脇順三郎の二重性 101

四 歴史的集約と巧まれた渾沌 105

五 順三郎——自己恢復と時代の逆説 108

六 ダーウイニズム 114

i 物質的競争原理／ii 有機体論的相対主義の立場

七 古い夢への憧憬と新たなパラダイム 119

八 飛躍 122

i 有機体論と飛躍／ii 「無からは何も生まれぬ」／iii 直観的飛躍
九 虚無の認識と科学主義の超克 129

i 唯物論的観点と植物的観点／ii 現代精神が求める宗教の四つ目の相／
iii 中庸と自然主義／iv 順三郎の天皇観／v 日本回帰

第四章 ワイルド「社会主義の下における人間の魂」とニューヘレニズム——西脇順三郎、その

の評価の所以 143

一 「社会主義の下における人間の魂」の評価 143

二 個人主義とナルシズム 148

三 生活者としての意識 151

四 自己規定——自然であること 153

五 自己集中性と自意識 158

六 批評精神 160

七 批評主義——批評としての藝術 163

八 自由 164

九 藝術としての批評の最初にして最後の原型 166

第五章 民族の魂と文体——ペイターとワイルド 168

一 ヘブライ的気質 168

二 事実崇拜 171

三 幻想性 176

四 ペイターのゲルマン的気質と事実感 179

五 コウルリツヂの合理的象徴思考 184

i 写実的描写の思想的背景／ii 合理化された怪奇

六 有機体論的全体性 195

七 文体の意と文体の魂 201

八 言葉の恢復 213

九 文体の非個人性 217

十 感覚的受容体論の淵源 220

十一 受容的気質とニューヘレニズム 223

第六章 ペイターの中世ルネサンス 231

一 中世ルネサンス 231

i ペイターの慧眼と反撥／ii 心の自由と知性の自由

二 甘美の濫觴 240

- i 新しい藝術感覺／ii 力強さと甘美性の融合／iii 原因探求に関わるペイタ
 - Ⅰの抑制／iv 愛情表現の諸形態／v 情濃やかなる愛／vi 力強さの変容／
 - vii ギリシア的ディオスクーロイの觀念とアラビア的情念／viii ゲルマン的象徴
- 思考に基づく批評主義

第七章 管窺素描 266

第一節 荷風『江戸藝術論』と英国唯美主義者 266

第二節 近代のナルキッソス 271

- i 個と全体との接点を探る／ii 感覺的受容体／iii 氣質と己を映す鏡／
 - iv 美のありか／v 自然主義と神話的世界／vi 人類の魂と繋がる時／vii ア
- ポローンとアポリュオン／viii 構築性
- 第三節 失われた言葉——サロメ 285

使用参考文献 289

あとがき 302

初出一覧 315

索引 331

第一章 西協的アタラクシア

——永遠、その思想的背景

一 生命の根源の探求

加藤郁乎（昭和四年「一九二九」～平成二十四年「二〇二二」）は平成四年六月六日に開かれた「西協順三郎を偲ぶ会」の記念講演で、『旅人かへらず』という最高の詩集」と称揚してこの詩集に最高の評価を与えた（『幻影』第十号参照）。そして又、平成十一年十月三日、「西協順三郎を語る会」主催の講演会「西協順三郎先生と私」（『幻影』第十七号参照）においても、郁乎は「私は西協先生の詩集の中でどれかを挙げよと言われたら、『旅人かへらず』を真っ先に挙げると言っている。これはまことに適切な指摘だと思われる。と言うのも、西洋の詩を母胎にして生まれた新体詩が発展して今日の現代詩に至っているわけであるが、この詩集はヨーロッパ系の詩に日本の伝統的な俳諧の精神を取り込んで劃期的な文体を生み出しただけでなく、これまでにない思想哲学を背景にしているからである。昭和二十二年八月に刊

行されたこの『旅人かへらず』と、その翌年四月に出た『古代文學序説』とは、西脇藝術の何たるかを考へる上で、その根源的な意味と価値を示すものを持つた一對と見なすことができようかと思われる。

このふたつの著作は西脇藝術の中心的理念である永遠や幻影の意味を考える時の出発点となる。『古代文學序説』は中世文学者としての西脇順三郎が、ゲルマン人の中世文学に入り込んでいるキリスト教的要素、ギリシア・ラテン文化の要素、或いはまたケルト的要素を取り除いて、ゲルマン人本来の本質を取り出そうとする目論見が含まれている。ゲルマン人本来の属性は、時代を経るにつれて様々な外来の偶然的要素が絡みつきながらも、その偶然的要素のあわいに時折ちらりとその姿を閃かす。偶然的な附着物の隙間から亡霊のようにひと時、顔を覗かせているゲルマン人本来の属性がこの本において引き出されてきている。まさにうっかり読み過ごされかねないその捉え難い民族の本質は幻影と呼ぶにふさわしいものかもしれない。

一方、『旅人かへらず』においても同様に人間性の本質の探求、即ち人間の本来的な絶対的一者を探求しようとする姿勢が藝術化されている。『古代文學序説』は主としてゲルマン人文化という特殊な事例が対象となっているが、『旅人かへらず』では、日本人の本来的な土俗的な姿のみならず、それを超えて人類或いはそれを超えた生命体としての宇宙という普遍的な事柄が対象となっている。この詩集の「はしがき」の中で、「自分の中にもう一人の人間がひそむ。これは生命の神祕、宇宙永劫の神祕に屬するもの」と言っている。宇宙という有機的生命的極微の一部位を構成している己の目を通して、絶対的一者たる宇宙の根源的生命的一端を垣間見ようとしたのである。その生命体としての宇宙の本質の一端はまさにふとした一瞬に姿を覗かせたかと思う間もなく、忽ちに消え去る「幻影の人」であり、「永劫

の旅人」と詩人の呼んだものである。それでは順三郎はどのような経緯でこのような世界観を持つようになったのであろうか。

二 エピクローロス哲学との出会い

かつて、昭和四十八年度の明治学院大学大学院の「ヨーロッパ文学」の講義中、順三郎は若い頃ペイターの長篇小説『享楽主義者マリウス』(Marius the Epicurean 一八八五年)を幾度も読み返し「全部暗記してしまった」と言った。「暗記してしまった」という言葉には筆者はいささか驚いたが、繰返し読み込むことでその思想を己の血肉にしまったことを言ったのであろうと理解した。事実、順三郎の藝術思想の根幹を辿ると、そのことが自づと理解される。ペイターについては順三郎は様々なエッセーの中で折に触れ語っているが、例えば『脳髓の日記』の中でも、「ペイターを読むことによつてヨーロッパの哲学、文学、美術を学ぶことが出来た」(『西脇順三郎全詩集』一二四二頁)と言っている。

順三郎は青年時代に『マリウス』だけではなく、マクミラン版のペイター著作集全十巻をすべて読破している。とりわけ『ルネサンス』(The Renaissance: Studies in Art and Poetry 一八七七年刊第二版)においてこの題名に変更)と『享楽主義者マリウス』(Marius the Epicurean 日本語の題名としては一般的にこの題名で通用しているが、原題に即して言えば『エピクローロス学徒マリウス』である)は最も重要な作品である。一八七三年に初版が出た『ルネサンス』(Studies in the History of the Renaissance)はオックスフォード関係者と宗教界から手厳しい批難を受けた。そこに現れている思想がキリスト教的見地からすると許し難いほどに異端的だったからであ

る。それでペイターは特に批難が集中した「結語」を、その四年後、一八七七年に『ルネサンス』第二版を出す時には取り下げたが、自分の思想信条を取り下げたわけではなかった。実際、その思想の辯明として新たに一八八五年に『マリウス』を公にして、自分の思想の何たるかを縷々詳細に語って見せたのであった。

そしてその『マリウス』を暗記してしまうほどにその思想を吸収したのが詩人西脇順三郎だった。キリスト教徒からすると許し難い異端的なその思想とは一体何だったかと言えば、それはエピクローロス哲学である。エピクローロス (Epikouros) は前三四一年にエーゲ海のサモス島で生まれ、アテネに「庭園学校」と呼ばれる学舎を開いて心の平静即ちアタラクシア (ataraxia) を旨とする哲学の研究と教育をして前二七〇年に亡くなった。原子論を説くこのエピクローロス哲学を十七世紀前半にフランスのピエール・ガッサンディ (Pierre Gassendi 一五九二―一六五五) が掘り起こして復活させた。更にアイザック・ニュートン (Isaac Newton 一六四二―一七二七) がガッサンディを通してその原子論を引き継ぎ近代物理学の基礎を築いてゆくわけで、エピクローロスの名は、一般にはプラトーン (Platon 前四二八／四二七―前三四八／三四七) ほどには知られていなくても、現代の私達にとってその哲学は極めて身近で重要なものである。

エピクローロスは科学のために科学を研究したのではなく、人が生活してゆく上で、自然現象に恐れおののくことなく、その原因を知って安心して暮らせるように科学研究をした哲学者である。心が安らかなこと即ちアタラクシア、或いはこの観念が繋がりを持つ仏教の言葉で言えば安祥三昧を追求した哲学者である。十七世紀のガッサンディが科学の方面においてエピクローロスを掘り起こしたのに対して、ペイターは藝術の方面でエピクローロス哲学を藝術思想として復活させたとと言える。尤もエピクローロスの人

生観としては、順三郎も『古代文學序説』の中で指摘しているように、早くに十六世紀にモンテーニュ(Michel Eyquem de Montaigne 一五三三〜九二)の『随想録』(Essais)において確立されている(『古代文學序説』一三七頁参照)。エピクローロス思想の滲透した『マリウス』を幾度も読み返して『マリウス』を「暗記してしまった」順三郎は、青年時代にペイターを通してエピクローロス哲学に基本的な藝術思想の拠り所を得ている、と見ることができないのではないかと考えられる。

三 眼の宗教の基盤

ラファエロ前派を立ち上げ英国唯美主義の魁となったダンテ・ゲイブリエル・ロセッティは藝術を謂わば宗教化した藝術家であった。同じ時代を生きたイギリスの詩人にして古典学者のフレデリック・マイヤーズ(Frederic Myers 一八四三〜一九〇二)はロセッティ藝術を「美の宗教」と呼んだ(Rossetti and the Religion of Beauty 参照)。それは実に肯綮に中つた言葉と言える。それと同じく順三郎は藝術を眼の宗教に仕立て上げた趣を見せている。詩人は評論「詩と眼の世界」の中で、「純粹に視覚から来る美」を求め、「純粹に眼の宗教を求めると言っている(『梨の女』二二三頁)。そして、「思想と感情との思考を去つて、純粹にヴィジョンの世界にはいりたい」(同上七頁)というのが、順三郎の窮極的な理想だったようである。この執拗な感覚へのこだわりはどこから来るのであろうか。ペイターは『マリウス』の中でこう言っている、「感覚で捉えられる現象だけに頼ろうという決意はいかに自然なことであらうか。感覚は感覚それ自体に関して絶対に私達を欺くことはないし、感覚だけに関しては私達は決して自分を欺くこと

著者略歴

昭和二十四年岐阜県生まれ

愛知大学大学院文学研究科・経済学部教授

日本文藝家協会・日本現代詩人会各会員

詩誌『未開』同人

日本ペイター協会元会長・理事

平成十七年～十八年、ケンブリッジ大学英語学部及びダーウイン・コリッジ客員研究員

著作

『ペイター——美の探求——』永田書房、昭和六十一年

『ペイターアン西脇順三郎』小沢書店、平成十一年

『加藤郁乎新論』沖積舎、平成二十一年、第十一回加藤郁乎賞受賞作

『英国唯美主義と日本』論創社、平成二十九年

訳著アーサー・シモンズ『ワールドとペイター』沖積舎、平成十二年

翻訳 A・C・ベンソン『ウォルター・ペイター』沖積舎、平成十五年

翻訳 ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ『いのちの家』書肆山田、平成二十四年

編訳著『100 Selected Haiku of Kato Ikuya (『加藤郁乎英訳百句選』) 沖積舎、平成二十三年

編訳著(俳画・自註イオン・コッドレスク)『Ikuya's Haiku with Cotrescu's Haiga (『加藤郁乎俳句とイオン・コッドレスク

俳画)』論創社、平成二十七年

詩集『流光』檸檬社、昭和五十六年

詩集『一元の音』花神社、平成三年

詩集『風紋』書肆山田、平成十八年

ペイター藝術とその変容
ワイルドそして西脇順三郎

二〇一九年九月二〇日 初版第一刷印刷
二〇一九年九月三〇日 初版第一刷発行

著者 伊藤 勳

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232
web. <http://www.ronso.co.jp/>
振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1814-6 ©2019 Printed in Japan

本書は令和元年度愛知大学学術図書出版助成金による刊行図書である。